

展覧会のご案内

各位

平素は格別のご厚情を賜りありがとうございます。

この度、愛知で活躍する工芸作家66名を集めた工芸展を開催いたします。

是非とも貴媒体にてご紹介いただきたく、お願い申し上げます。

古川美術館 分館爲三郎記念館特別展

愛知の工芸2020

2020年3月14日(土)～5月6日(水・振休)

一点ものの手仕事の祭典!!

総勢66名の作家が繰り広げる

愛知県から全国へ！垣根を超えた工芸展

古川美術館では2015年に「メイドイン愛知」と題し、〈愛知県産〉に着目した工芸展を開催しました。そして2回目となる本展では〈作家と素材〉に焦点をあて、この地で活躍する工芸作家を紹介します。生産のほぼすべてが職人による手作業で行われていた明治以前、工芸品とは美しさを兼ねそろえた実用品でした。しかし明治以後、産業革命により機械化が進み、工業製品が生まれ、大量消費されるようになると、高い芸術性を持たせた工芸品が生まれます。しかし工芸が美術として認識されるまでには至っておらず、現在のように工芸美術と呼ばれるようになったのは、工芸に携わる作家たちの運動でした。彼らは土、漆、石、木、糸、布などの素材を駆使しながら制作を積み重ね、素材の魅力を最大限に生かし、自らの表現を形にしてきました。その結果、現在では世界に誇る日本の文化へと成長を遂げました。長い年月をかけ、我が国の文化基盤として成長した背景には、作家たちの素材と向き合う真摯な姿を見ることができます。

本展では、そうした工芸の素材と真剣に向き合い、制作を続ける現代作家66名を日展・伝統工芸展などの有識者と共に選考しました。愛知県は《モノづくり》として有名です。それは物流の良い土地柄と豊かな自然素材に恵まれた雄大な土地を有していたことが関係し、工芸と工業・産業が共に発展してきたからと言えます。地理的にも恵まれた愛知から伝統・創作・前衛・クラフトといった垣根や枠を超えた工芸展を開催いたします。



梅本孝征「色絵流加彩器」

お問い合わせは古川美術館 学芸課まで 052-763-1991

愛知県のここがすごい！

日本の中央に位置する愛知県は東西の領域へのアクセスに優れており、さらに大都市東京と大阪をつなぐ都市として交通の便も早くから発展してきました。現在では《モノづくり》都市として全国にその名を誇る愛知県ですが、歴史的に中部は古くからモノづくりの盛んな地域でした。それを証明するのが、経済産業大臣が指定する伝統工芸品で、現在その数は全国で222点。うち愛知が12点(全国5位)、今も多くの作家が活躍しています。このように工芸品が盛んになったのは、自然に恵まれた広大な土地があり、豊富な資源が採取できたことと合わせ、できたものを関東、関西へ展開できる好立地の後ろ盾があったからといえます。

ジャンルで見る愛知の工芸2020 —陶芸—

なんといっても陶芸王国
六古窯のうち2つを所有するのは
愛知県のみ

瀬戸

—東海のやきものの歴史はここから始まった—

東海地方における焼き物の母体は五世紀ごろに築窯した猿投窯であった。猿投窯では植物の灰を釉薬にした灰釉陶器が9世紀には盛んになり、全国でも美しい焼き物として一目置かれていたのである。その猿投窯の流れをくんで瀬戸窯は10世紀に誕生。室町時代になると瀬戸窯では釉薬の研究が盛んに行われており、これまでとは異なる焼き物が生産され、北は北海道、南は九州と全国規模で焼き物が流通し、その中心にあったのが瀬戸窯であった。その後、江戸時代に入ると瀬戸は美濃に生産地域を移しながら連房登窯を築窯し、さらに、黄瀬戸、瀬戸黒、志野、織部といったこれまでからは想像つかないほどの美しい釉を開発し、瀬戸の窯業は一層盛んになっていく。鎖国が解け、海外への輸出が可能になった明治では、焼き物も豪華絢爛となり世界各国へ輸出。日本の高い技術は焼き物介して世界に発信されたのである。



加藤令吉「宙一光幻」

土壌に恵まれた瀬戸

瀬戸は長きにわたり、やきものに適した陶土・釉薬の原料・薪など豊富な資源に恵まれ、やきものの町として発展してきた。地質学的には、新第三紀鮮新紀(約700万年から300万年前頃)に、淡水湖であった東海湖及び古琵琶湖に堆積してできた蛙目粘土と木節粘土という慮質な粘土が豊富に産出する。この粘土の大きな特徴は鉄分がほとんど含有されていないこと。そのため素地の白い焼き物をつくることができたのである。加えて鉄分や不純物が少ない土は粘りがあって成形しやすく、焼成温度も高いため、瀬戸窯は中国の白磁や青磁をモデルに多種多様な製品の生産が可能になった。こうした優れた陶土を豊富に産出した瀬戸は、他の窯業地にはない製品を作る出すことができたのである。

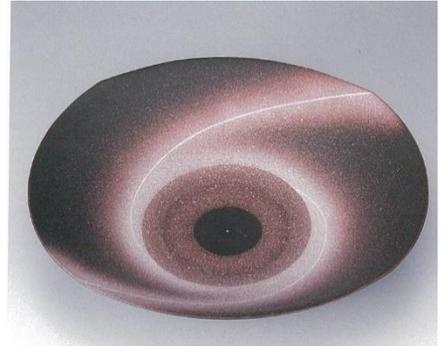


ジャンルで見る愛知の工芸2020 —陶芸—

なんといっても陶芸王国
六古窯のうち2つを所有するのは愛知県のみ

常滑 —最古で最大規模の窯、力強い壺の歴史はここから—

猿投窯の南部に位置する常滑窯の母体も瀬戸と同様に猿投窯である。平安時代末期の製品は素朴な中にも王朝文化の名残を感じさせる優美さを持ち、経塚などの仏教遺跡で用いられる事例が少なからずあった。また築窯当初は瀬戸と同様、穴窯による雑器を生産ラインの中心に据えていたが、戦国時代の16世紀には大窯(おおがま)に改良され、壺や甕などの大型の焼き物が中心となる。また鉄砲の普及により大型の壺は火薬原料の貯蔵具として使われていたとも言われている。さらに室町時代になると、お茶を飲むことが普及し、お茶の葉を貯蔵するのに活躍していた。江戸時代には真焼物という硬く焼き締まったものと現在の朱泥のような赤物と呼ばれる柔かな素焼が作られるようになる。真焼物は甕や壺が中心で、その他に徳利や急須。一方、赤物は甕のほか火消壺、蛸壺、焜炉(こんろ)、蚊遣りなどがつくられるようになり、瀬戸とは異なった生活に密着していた焼き物として発展を遂げてきたのである。



(2015年出品作品) 鯉江廣 「あけぼの彩鉢」

ジャンルで見る愛知の工芸2020 —尾張七宝—

透明感の高さとジャポニズム的文様で世界を魅了した

七宝焼の歴史は紀元前までさかのぼるが、ここ、愛知県で再興されるようになったのは、天保年間(1830年頃)。尾張国の梶常吉が、オランダ七宝の皿を手がかりにその製法を発見し、改良を加えたのが始まりとされてる。尾張七宝を一言で例えると、「緻密な技術、巧の技の結集」といえる。

陶磁器のように土を成形して焼き上げる焼物とは違い、七宝焼は銅又は銀の金属素地を用い、その表面にガラス質の釉薬を施し、花鳥風月、風景などの図柄をあしらったところに特徴があり、特に図柄の輪郭になる部分に銀線を施す有線七宝は尾張七宝の代表的な技術である。尾張の地で梶常吉によって広められた七宝は、「近代七宝」の始まりとさえ言われており、以降七宝は尾張で盛んに制作されるようになった。幕末には尾張の特産品として認識されるまでになり、尾張七宝は、現在まで継承・発展してきた、日本の七宝の本流といえる。



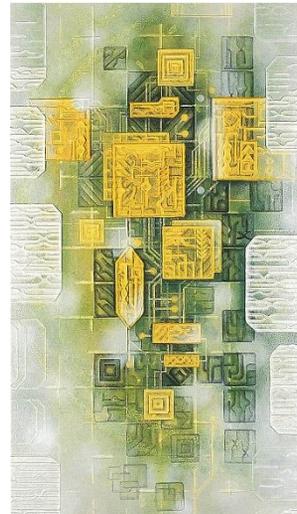
(2015年出品作品) 太田吉亮「映」

和紙で絵画を作り出す

ジャンルで見る愛知の工芸2020 —小原和紙—

現・豊田市小原地区では、室町時代から冬の仕事として「紙すき」が行われてきた。自然豊かなこの地区はコウゾの木育成に適しており、明治から大正時代には「三河森下紙」という番傘用の紙や障子紙などを多く生産する「和紙の村」として定着する。

昭和初期、時代の変化とともに和紙の需要が減り、実用品としての伝統的な和紙は衰退していきしたが、和紙そのものを美術作品とする小原工芸和紙が誕生し、工芸の世界に新たな息吹を与えたのである。小原和紙は和紙原料のコウゾを染色し、それを絵具代わりに絵模様を漉き込んでゆく美術工芸品。絵画的に和紙をすくこの美しい世界観は、ほかの紙芸にはない可能性を秘めた分野といえるのである。

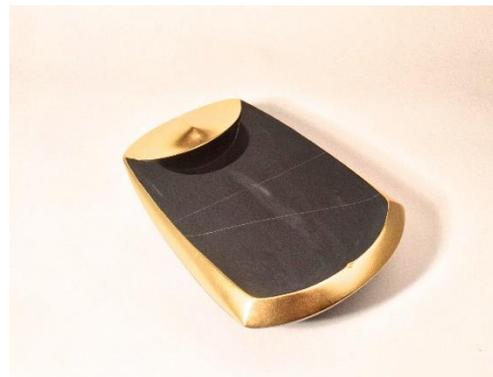


(2015年出品作品) 二村純生「童夢」

ジャンルで見る愛知の工芸2020 —硯—

開山1300年！！漆黒の美

愛知県、奥三河新城市、そこには1300年も伝わる愛知の芸術があった。開山1300年の鳳来寺山周辺からは、金鳳石、鳳鳴石、煙巖石という三種の石が産出する。それを活かして始まったのが硯の生産。その始まりは鎌倉時代、あるいは室町時代と考えられ、江戸になるとその勢いはますます盛んになり、奥三河の名産ともなり、一度は衰退したものの、歴代名倉鳳山によってその技術の復活を果たす。硯は他の工芸品に比べ、色もなく形もその用途からいって自ずから制約を受け、個人的に意図表現するという事は大変難しい類のもの。反面、工芸的見地からすれば、素材からくる様々な制約はかえって究極的表現への一途の道となる可能性を秘めている。堅い天然石からできていながら、体内に水をたたえているかのような潤いある漆黒。滑らかで、それでいて鋭く、広がりを持ちながら完結された形。硯は、機能美とも美術品の美とも異なる独特の美しさを宿した、まさに工芸の真髄を携えた分野といえるのである。



名倉鳳山「光陵硯「Maschera inca」

ジャンルで見る愛知の工芸2020 —漆芸—

古来より伝わる日本最古の塗料

「japan」には「漆」・「漆器」という意味がある。これはかつて漆器が日本の代表的な輸出品だったころの名残であり、英語では「china」が中国・陶磁器を意味するのと同様に、「japan」は日本の漆器・漆芸品を指す。日本という温暖湿潤な気候の中で育った漆の木から採取される日本漆は、日本の気候と日本人の美意識、そして匠の技によって手を加えられてきた分野である。漆は、古くは福井県鳥浜貝塚から縄文時代前期と考えられる朱塗りの櫛が見つかるなど、装身具や容器の塗料として利用されてきた。漆を塗ることで接着剤にもなり、防水性・耐熱性・耐久性が高まる。何よりも麗しい深みのある色が生まれるのである。独特の質感、光沢とあたたかくやわらかみのある手ざわり、気品に満ちた風格がある漆芸は、JAPANという英名からもわかるように、日本の伝統文化を代表するものである。



安藤源一郎「紙胎菊醬翠嵐丸盆」

ジャンルで見る愛知の工芸2020 —染織—

細部は美に宿る。織と色の生み出す精緻な世界

染織は日本の歴史に深くかかわり発展と遂げている。人々の衣類として、あるいは住居の素材としてその時代の生活様式に沿って形を変化し続けてきた。生活の中での必需品だった染織も生活にゆとりが生まれるとアート志向の強い上質なものが求められるようになる。さらに、人工素材が開発されるとこれまでの自然素材と組み合わせることでコントラストを強調した新しい表現の展開をみせるようになった。その魅力は作家の目的に合わせた素材選定と染め上がりの美し技術、最後におこなわれる美しいパターンあるいは文様である。染織には布を織りあげる前に染織をする先染織物と製織後に染織する後染織物がある。本展では先染織物は着物に多くみられ、糸本来の美しさとたて糸とよこ糸が織りなす美しく繊細な文様を楽しむことができる。一方で後染織物は額装染織作品にみられ、絵画的な表現から作家のインスピレーション、発想力をダイレクトに堪能できる。



石上久美子「夜の浮遊」

関連イベント

～ギャラリートーク～

日 時 | 3月14日(土) / 4月3日(金) / 4月29日(水・祝)
各日14:00～(古川美術館30分 分館爲三郎記念館30分予定)
参加費 | 無料(別途展覧会チケット必要)
会 場 | 古川美術館 分館爲三郎記念館

工芸作家による ～作品講評会～

日 時 | 4月12日(日) 11:00～加藤令吉(日展会友)
4月18日(土) 14:00～梅本孝征(愛知県立芸術大学教授)
4月25日(土) 14:00～名倉鳳山(日本工芸会東海支部幹事長)
参加費 | 無料(別途展覧会チケット必要)
会 場 | 古川美術館 分館爲三郎記念館

人間国宝・土屋順紀

東京国立近代美術館工芸課長・
唐澤昌宏

特別シンポジウム 技と芸

日 時 | 4月12日(日) 13:30～15:30
参加費 | 1,000円(別途展覧会チケット必要)
会 場 | ルブラ王山
パネリスト | 土屋順紀(染織・重要無形文化財保持者)
唐澤昌宏(東京国立近代美術館工芸課長)
加藤令吉(日展会友)
梅本孝征(愛知県立芸術大学教授)
名倉鳳山(日本工芸会東海支部幹事長)

2020年度古川美術館連続文化講座《作品を多角的に考える》

～足立守(日本最古の石の発見者)が聞く「作品と素材・原料」考～

2020年度の連続文化講座 第一弾(4月から6月開講分)の講師は、日本最古の石を発見した名古屋大学特任教授 足立守との対談です。毎回、ゲスト講師として作家にご登場いただき、各分野の素材・原料について考えます。

日 時 | 13:30～15:00 ※各回ゲストは以下の取り

参加費 | 各回1,000円(別途入館料必要)

会 場 | 古川美術館 3階会議室

4月17日(金)

ゲスト作家 硯刻家・名倉鳳山

名倉鳳山が世界各国の石で制作した硯を見ながら、原料となった硯の「石」について対談を通して掘り下げます。

5月1日(金)

ゲスト作家 陶芸家・太田公典

やきものの「青」は何からくるのか? 「ラピスラズリ」伝説に足立守の鉱物学と太田公典の最新科学で迫ります。

6月5日(金)

ゲスト作家 彫刻家・絹谷幸太

触れる彫刻を作り続ける絹谷幸太。石彫に何故「その石」が選ばれるのか。地質学者 足立守と芸術家絹谷幸太で考えます。

愛知の工芸2020

～作家来館日～

会期中の週末(土曜日・日曜日)とゴールデンウィーク

(5/2～5/6)は出品作家が来館します。

各日の当番は右記の作家一覧をご参照ください。

なお、作家都合により急遽変更する場合もございます。ご了承ください。

日 時 | 3/14～5/6会期中の毎週

土曜日ならびに日曜日(4/12を除く)

ゴールデンウィーク(5/2～5/6) 各日14:00～

参加費 | 無料(別途入館料必要)

会 場 | 古川美術館定 員 | 各席7名

～花時茶会～

お茶会情報

日 時 | 3月28日(土)

〈1席目〉10:15 〈2席目〉11:00 〈3席目〉11:45

〈4席目〉13:30 〈5席目〉14:15 〈6席目〉15:00

定 員 | 各席7名

参加費 | 2,000円(別途入館料必要)※但し、「単館券」の利用は不可

会 場 | 庭園茶室「知足庵」(座礼)

備 考 | 申し込みは2020年2月20日(木)より開始

～「愛知の工芸」茶会～

お茶会情報

愛知の工芸展の出品作家の茶道具を使ってお茶会です。

日 時 | 4月23日(木)

〈1席目〉10:15 〈2席目〉11:00 〈3席目〉11:45

〈4席目〉13:30 〈5席目〉14:15 〈6席目〉15:00

定 員 | 各席7名

参加費 | 2,000円(別途入館料必要)※但し、「単館券」の利用は不可

会 場 | 庭園茶室「知足庵」(座礼)

備 考 | 申し込みは2020年2月20日(木)より開始

一出品作家一
五十音順

【一陶芸一】

明石 朋実	4/4
伊藤 公洋	4/5
岩淵 寛	3/14
梅田 洋	4/5
梅本 孝征	4/18
梅村 拓生	5/6
太田 公典	4/25
大谷 昌弘	4/18
岡崎 達也	3/22
加藤 令吉	4/12
柄澤あかり	3/15
鯉江 廣	3/22
小林 由依	3/28
近藤 葉子	5/2
小枝 真人	3/22
酒井 智也	3/14
佐藤 文子	3/15
高山 愛	3/15
竹内孝一郎	5/3
田中 良和	4/26
樽田 裕史	3/15
寺田 鉄平	3/14
富田 亮	5/4
波多野正典	5/5
前田 正剛	4/5
水野 真澄	3/14
宮下 陽	4/18
宮部 友宏	3/29
森 克徳	5/5
屋我 優人	4/4
山口 真人	調整中
矢作 薫	4/18

【一染織一】

石上久美子	5/3
磯 緋佐子	4/26
伊部 英子	4/19
上田 章子	4/5
小山田尚弘	5/4
加藤 玲	調整中
神谷あかね	4/4
久野 剛資	3/21
小林 敬子	4/26
小林佐智子	4/11
杉浦 雅子	4/11
多々内郁子	3/14
永田 敏美	調整中
新野 素子	4/26
二宮 祐子	5/5
早川 嘉英	3/28
古田 好孝	4/19
間瀬 邦子	4/11
吉田美年子	3/28
渡会 清子	4/19

【一漆芸一】

浅井 啓介	5/3
安藤源一郎	5/3
安藤 則義	3/21
鶴飼 敏伸	3/29
丹羽 清美	5/2

【一七宝一】

池田 貴普	5/6
太田 吉亮	4/11
柴田 明	5/2

【一紙芸一】

加藤 英治	4/19
二村 純生	3/21

【一諸工芸一】

大橋 敏彦	4/25
川口 清三	3/29
杉山夕カ子	5/4
名倉 鳳山	4/25

お問い合わせは古川美術館 学芸課まで 052

展覧会情報

展覧会名称

古川美術館 分館爲三郎記念館
特別展「愛知の工芸2020」

会場

古川美術館1階展示室と分館爲三郎記念館

会期

2020年3月14日（土）～5月6日（水・振休）

午前10時～午後5時（入館は午後4時30分まで）

主催

公益財団法人 古川知足会

後援

愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会

中日新聞社 CBCテレビ 東海テレビ放送

スターキャット・ケーブルネットワーク株式会社

休館日

月曜日（但し、5月4日（月・祝）は開館）

観覧料

大人1,000円 高・大学生500円 中学生以下無料

チケットぴあPコード685-184

【お問い合わせ】

公益財団法人 古川知足会 古川美術館・分館 爲三郎記念館

電話 052-763-1991 FAX 052-763-1994(学芸課)

〒464-066 名古屋市千種区池下町2丁目50番地

担当学芸員 林奈美恵 (n_hayashi@furukawa-museum.or.jp)

広報担当 学芸課 山内綾子 (a_yamauchi@furukawa-museum.or.jp)

広報使用画像

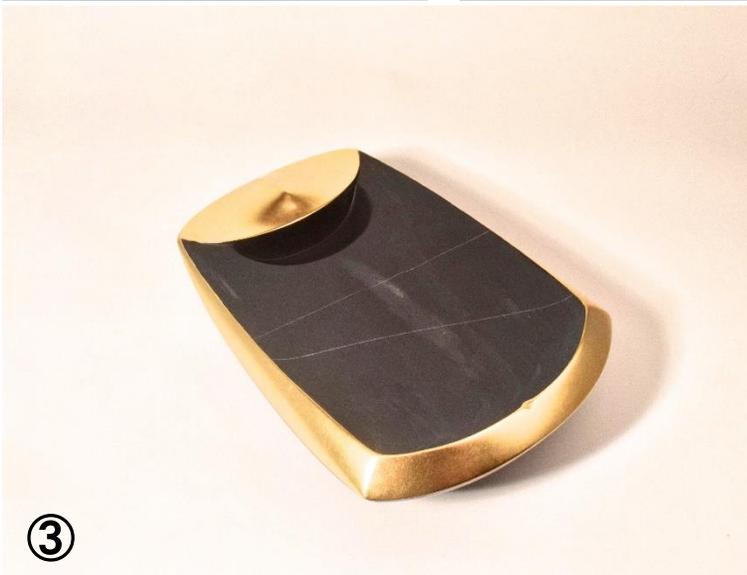
※ご希望の方はご連絡ください

◆古川美術館

担当学芸員：林 奈美恵

電話：052-763-1991

mail : n_hayashi@furukawa-museum.or.jp



①加藤令吉「宙—光幻」

②梅本孝征「色絵流加彩器」

③名倉鳳山「光陵硯 Maschera inca」